

日本語教育実践研究（7）

－「漢字指導」の実践－

鈴木 義昭

早稲田大学日本語教育研究センターの授業の中で、ユニークなものの一つに「漢字指導」があります。日本語教育の中でも、漢字学習の重要性はつとに認められていますが、一コマ全てをそれに当てている学校は、恐らく本センター以外にはないでしょう。元々はクリニック的要素が強い、個別的学习法を取っていましたが、現在では、独立した科目（随意）となり、A～Cの三クラスを持ち、それぞれの実力に応じたクラスに参加するというシステムを取るに至りました。授業では、Aが初級、Bが中級、Cが上級となっています。自分は初級漢字が弱いとか、難しい漢字に挑戦してみたいとか、学生の要求によりクラスを選ぶことができます。目下のところ、Cクラスでは、プリント教材を使って授業を行っています。

また、この漢字指導のクラスは、日本語教育研究科の実践研究（教壇実習）の場ともなっていて、毎学期5人～10人前後の大学院生が実習を行っています（今学期は五人でした）。外国留学生の履修生が多い漢字教育実践研究の授業では、同じような年齢、同じ国の出身の学生・院生が仲良く学び合うという場面が随所に見受けられます。院生たちが正式な教師ではないため、受講生にはより身近な感じがして親しみが持てるのでしょう。一方、大学院生たちは、実践教育の授業の中で、教案の作り方を学び、実習を通じて漢字の知識を学び、教壇に立つための訓練をしていくわけです。

漢字というものは、日常生活の中では、単独で表れることは少なく、大部分が二字の熟語（あるいは、二字以上の熟語）として文中に登場しますから、一字一字を丹念に覚えていくよりも、熟語を含んだ一文を徐々に覚えていく方がより効果的です。漢字教育は語彙教育でもあり、文章表現・文法の学習でもあるというわけです。昨年作られた『頻度順漢字 2100』では、その漢字が使われる熟語をさらに頻度順にし、それぞれに例文をつける方針を取っています。

国外では、漢字教育がある種のブームになっています。この授業では、漢字系・非漢字系学生が共に学んでいるというメリットを生かし、新しい教材を開発し、ユニークな漢字教育を展開してゆきたいものだと考えています。

（スズキ ヨシアキ・日本語教育研究科教授）